

【論文】

ドリュ・ラ・ロシエルの政治思想

—『ジル』の時代—

山本周次

はじめに

第一章 戦争体験

第二章 資本主義・社会主義・ナショナルリズム

第三章 スペイン戦争

おわりに

## はじめに

ドリュ・ラ・ロシエル（一八九三—一九四五）は、戦後長い間とりあげられることのない作家であった。社会主義がいまだその価値を減ぜず、フランスにおいてはレジスタンスの神話が君臨している時代にあつては、対独協力のヴィシー政権とその協力者たちの存在は、単なる歴史的汚点にすぎなかった。しかし、社会主義がその現実によって影響力を大きく失なっていくにつれて、フランスでもレジスタンスの神話という単眼的見方は次第に後景に退くようになってきた。それに替わって、ヴィシー政権下での対独協力派（コラボラトゥール）の実態を冷静に見直そうという気運が生じた。対独協力派の代表的知識人であるドリュの再評価はこうした流れの中で、一九六〇年代から徐々に日の目を見ることになったのである<sup>(1)</sup>。

ドリュは、その本質からすれば一個の文学者である。彼は両大戦間期のフランスにあつて、詩・小説・戯曲・エッセイにわたって多くの作品を残した。しかしドリュの関心が、ヨーロッパ、とりわけフランスのナシヨナリズムとこの事実に向けられるとき、彼は文学者の立場にとどまることはできなかつた。彼は一方で自分の小説の中で自我のデカダンスに脅かされている人物を描くことによつて、そこからの脱出口を模索する<sup>(2)</sup>。それと同時に、ドリュは現実の政治活動にも積極的に加わつていった。ここから彼のファシズムとの関わりが生まれたのである。ドリュを全体として理解するためには、表現された思想と政治的实践とをそれぞれ検証し、しかる後にそれらの間での関連を考察する必要がある。しかし、ここでは主にドリュの作品の中に表現された思想を検討の対象にしたい。

ドリュの政治思想の根底には、第一次大戦後の復員世代に共通の戦争体験とそれに伴う文明批判が横たわっている。それ故、本稿ではドリュの戦争体験を先ず考察し、次いで一九二五年から一九三四年に至るドリュの思想形成の過程

を取り扱うことにする。最後にドリュが小説『ジル』の中で描いているスペイン戦争を彼の政治思想の適用例として簡単に分析してみたい。このような手順を踏むことによって、ドリュの考えたファシズムとは何であったか、またそれはナショナリズムといかなる関係にあるのか、という問題に接近するのが、本稿の目的である。

## 第一章 戦争体験

ドリュがその生涯にわたって幾多の思想遍歴を繰り返したことは、今日よく知られている。実際に役自身が『ファシスト社会主義』の中で、自らの思想遍歴を四段階に区分している。今ここでそれを繰り返すなら、「一、アクシオン・フランセーズと古い右翼。二、古い右翼から古い左翼へ。三、新しい社会主義と古い社会主義政党。四、資本主義的ナショナリズムとファシスト社会主義。」<sup>③</sup>というのがそれである。彼はそこで古い右翼（アクシオン・フランセーズに代表される反動主義）によっても古い左翼（マルクス主義）によっても救済されることのないヨーロッパの頹廢と自己の心の渴望とに促されて、新しい社会主義としてファシズムを選択したのである。

ところで、フェリーチェは、ファシズムの発生要因について「第一次大戦と大衆社会への移行の危機」という二つを挙げている。フェリーチェのようにファシズムをヨーロッパに限定する場合には、この二つの要因は欠くことのできぬものである。しかも大衆社会の問題性は、第一次大戦を契機にして露呈されるのである。「大衆社会という現実だけでは、さきに描かれたファシズムの種を、ファシズムという果実にするのに必要な、決定的な何か、すなわち、起爆力が欠けている。つまり、それには、第一次大戦の衝撃を、程度こそちがえ、それが、ヨーロッパ全土にひきおこした危機がなければならなかった。」<sup>④</sup>それ故、戦争体験のもたらしたものを、復員世代に共通する側面と、とり

わけドリユにおいて固有の側面とについて考える必要がある。ドリユの小説『ジル』（一九三九年）は、主人公ジルが一九一七年冬に第一次大戦の戦場からパリに復員する場面が始まり、一九三四年二月六日事件を最大の山場とし、エピローグでスペイン戦争に参戦するところで終わっている。一般に指摘されている通り、ここでのジルは作者ドリユとほぼ重なり合うと考えてよいだろう。但し、『ジル』においては主人公ジルは孤児として設定され、第一次大戦前の彼の行動については、後見人カラントン老人に育てられたということ以外は何も語られていない。しかもジルの戦争体験は、ここでは生命の高揚という一点に収斂されている。このようにドリユは自らの体験を純粹化し神話化して、ジルに結晶させた。そうすることによって、小説『ジル』は第一次大戦後から一九三四年二月六日事件に至るフランスの精神史を写しだす物語となりえたのである。

ドリユは、一九一四年、歩兵伍長として第一次大戦に参戦した。彼はこの年の八月二三日、シャルロワの会戦で平時には体験することのできなかった精神の高揚を体験する。彼は同時に、一九一九年三月に復員するまでに三度の負傷を体験する。

ドリユのこうした戦争体験には、本来二つの相異なった側面があったことに注意する必要があるだろう。第一に、彼の参加した第一次大戦は、その時まで彼の夢想していた様な、雄々しいヒロイズムに彩られた戦争ではなかった。そこにあるのは、機械と技術とが支配する近代戦に他ならなかった。ドリユは、戦場では、自我の絶対的価値を説く個人主義が何の意味ももたないことを発見する。「あまりにも広大すぎる戦場へと通じる道路上を、われわれ何百万の兵士がそうして果てしない列を作って進軍している間に、わたしは生まれてはじめて、一個の人間なんて人類の中に紛れてしまっているのだという圧倒的で有無を言わさぬ印象を味わった。平和の幻想に満ちた世界ではひねり出

せるかもしれない——事実一九一四年以前のあの悠然と落ち着きはらった時代にはいくらでもひねり出せた——個性だ、獨創性だ、わたしの獨自性だ、例外的な自分だなどといったすべてのまやかしが、雲散霧消して、残ったのは、自分は蟻塚にへばりついている一匹の蟻にすぎないという事実だった。」<sup>(7)</sup>

しかし、ドリュは個人の価値を否定してしまうかに見えるこうした冷徹な事実の内に、かえって積極的な側面を見出した。そこでは自己を他者から隔てる冷たい眼差しが欠如しているために、彼は自由でありうることに気づくのである。「わたしを區別する他人の視線がないため、わたし自身にもわたしは區別がなくなっていた。この発見は一氣にわたしをあゝの孤独の神秘学、孤独な人間が彼の孤独のなかで自分自身の見分けもつかなくなり、自我の内部に自我ではない何かが入り込んでくるという神秘学にわたしを引き戻した。」<sup>(8)</sup> こうしてドリュは他人の視線から解放された自我が他者と融解する地点にまで到達する。「わたしが失なわれてしまった以上、どうしてももっとそれ以上にわたしを失なつてはいけないのか。わたしを全体のなかに、そしてわたしと全体を無のなかに見失なつたその喪失感を癒すには、ただ一つの手段しかなかった。それはとことんわたしを失なうことだった。」<sup>(9)</sup> ドリュは他者と自己とを隔てる視線の支配下で常に分裂した自我に悩む平時とは異なつて、各自が全体の中に埋れることによつて一つの規律の下で整然と行動する戦場においてこそ、とらわれた自我の解放を見出したのである。これがドリュの戦争体験の第二の側面であり、彼のファシズム觀の基底にある考え方である。

こうしたドリュの戦争体験の積極的意味づけにおいて、彼の幼年期からの個人的体験が一定の役割を果たしていると考えられる。彼は幼年時代から他者との関係において不安定であった。「わたしは生まれつき憂鬱症で人見知りするたちだった。人々との付き合いから打撃をうけて傷ついたり、人々を傷つけたという後悔を抱く前から、わたしは

彼らを避けていた。<sup>(10)</sup>」他人との接触によって自らの自我が脅かされることを恐れて、予め自己の内に閉じこもるドリュ。彼のこうした性格を決定づけたのが、彼自身三度にわたってそれに言及することになる、有名な「雌鶏事件」<sup>(11)</sup>であった。彼が自らの戦争体験を意味づける際に、彼のこうしたパーソナリティが一つの要因になりえたことは否定できないだろう。しかも自我の分裂に悩まされているのはドリュ一人ではなかった。大衆社会における自我は常に分裂の危険にさらされているのである。

しかしながら、こうした傷つきやすい自我を抱えた青年がすべてドリュの道を歩んだわけではない。しかも彼においても、この戦争体験の意味を発見するのは、二〇年を隔てた後の一九三四年二月六日事件に際してなのである。それ故、ドリュの戦争体験と彼のファシズム観との関連を考える場合、当時のフランスの精神状況とその後のドリュの歩みに目を転じてみる必要があるだろう。

第一次大戦はフランス側から見れば勝ちいくさだったにもかかわらず、それはフランスに甚大な被害をもたらした。「この戦いによってフランスの総人口の一六パーセントの人命が失なわれ、とりわけ一八歳から二七歳までの青年の二七パーセントが戦死し、負傷者は三三〇万、国庫の負債額は三百億フランに達し、勝利の日の翌日から未曾有のインフレがこの戦勝国を襲い、第三共和制の支柱だった中産階級の生活基盤は根底から覆えされたのだった。」<sup>(12)</sup>

しかし、フランスを脅かしたのはこうした物質的損害や経済的・政治的損失だけではなかった。むしろより根本的なのは、フランスを襲った精神的危機であった。それを最も生彩に富んだ筆致で描き出したのは、ヴァレリーのエッセイ「精神の危機」である。ここで彼は、戦争の現実の中で、これまで信じられてきたヨーロッパ文化の理念が何の役にも立たなかったことへの幻滅がヨーロッパ全体をおおっていることを指摘した。このヨーロッパ精神の崩壊の危

機は、とりもなおさずフランスが世界の中心であることを止めることでもあった。つまり、かつてヴォルテールが『ルイ十四世の世紀』で定義した文化的統一体としてのヨーロッパという理念<sup>13</sup>は、第一次大戦の現実の中でその意義を喪失したのである。

こうした精神的危機の中で、そこからの出口を求めてフランスには様々の文化運動が叢生した。中でも特筆すべきはダダイズムとそこから生まれてきたシュルレアリスムの運動である。自由で自律的な個人という観念が第一次大戦の戦場で崩壊するのを実感した新しい世代は、理性的統御から解放された無意識の運動を叙述するダダイズムの内に、新しい文学理念を見出した。彼らは雑誌『文学』(Literature)によりながら、既成の価値に対する拒否を宣言した。<sup>14</sup>

ドリュも最初この運動に加わった。しかしこの本来は芸術運動であったものが次第に政治化し、バルビュスらの『クラルテ』グループや共産党に接近するのを見て、ドリュは次第に彼らと袂を分かつようになる。その直接のきっかけは、ドリュが一九二五年八月にN・R・Fに発表したエッセイ「シュルレアリストたちの大きな過ち」<sup>15</sup>であった。

ドリュのここでの批判は、アラゴンを始めとするシュルレアリストたちが、既成の価値の拒否というこれまでの立場を捨ててコミュニズムに接近した点に向けられている。つまりシュルレアリストたちは、ドリュもその執筆者の一人に加わっていたパンフレット『死骸』の刊行とモロッコ戦争批判とを通じて『クラルテ』グループに近づいたのである。ドリュはその批判の中でシュルレアリストたちのおかした二つの過ちを挙げている。すなわち第一に彼らの東方つまりロシア志向がそれである。しかしそれ以上にドリュにとって大きな過ちと思われるのは次の点であった。つ

まり彼らは自らの使命を裏ぎって、フランス文学の旧弊である過ち、政治をするという過ちに落ち込んでいる。ドリュはそれに対して、文学の本来の使命である表現という行為に立ち返ることを訴えたのである。

しかしながら、こうしたドリュのアラゴン批判の底には、ドリュの内に運動に参加した当初から存在していたシュルレアリストたちとの違和感が影を落としていることを見逃すことはできないだろう。マルセル、アルランはドリュに固有のこの特質を的確に表現している。「ドリュは全体に自己を解消することができなかった。行動への渴望が強すぎて、一つの躍動に屈することができないのである。そのあとには、批判感覚、疑惑、精神と肉体との無力感が彼を麻痺させる。同盟を求めるには目覚めすぎている彼は、自己を取り戻すために、身を入れたり、身を貸したりするだけなのだ。」<sup>(16)</sup>ドリュにとっては自己が自己であることが何よりも重要なことであった。文学はそのための手段であった。それ故に、文学がその目的を忘れて、政治に属するのはドリュにとってがまんのない過ちであった。それでは、ドリュの後の政治への関わりは、このドリュの基本的理念からそれてはいないのだろうか。ドリュにとって政治的实践とは、文学の外にあるイデオロギーを選びとるものではない。政治は文学の延長上にある、というのが彼の考えだったように思われる。

戦争体験は事実としてはドリュの世代のすべての人々が経験した。それを自己の固有の経験として肉体化するには長い歳月を要する。ドリュにとってはアラゴンとの対立が始まる一九二五年から一九三四年に至るまでの期間が、彼の政治思想の形成期ということができよう。この意味で、一九二五年はドリュにとって一つの転機になった。<sup>(17)</sup>ドリュはこれ以後九年かけてドリュになったということができよう。その点は、戦争体験を形象化した『シャルロワの喜劇』(一九二四年)の中で明らかにされている。<sup>(18)</sup>



## 第二章 資本主義・社会主義・ナショナリズム

先に述べた通り、アラゴンを始めとするシュルレアリストたちとの訣別がドリュの政治思想の形成に大きな影響を与えた。そこでドリュが批判の俎上に載せたシュルレアリストたちの内で、アラゴン、ブルトン、エリュアール、ペレ、ユニックの五人は一九二七年に共産党に入党することになる。ドリュ自身も彼らとは違った方向で、次第に政治に傾斜していった。ドリュはこの時期について「最後の日記」の中で次の様に回想している。「ぼくは二六年から三年にかけて、コミニズムに接近していった。すこしばかりマルクスを勉強し、経済学を勉強した。二八年か二九年以後、事実上、社会主義者だった。<sup>(19)</sup>」

この時期のドリュの著作活動で重要なのは、一九二七年にエマニュエル・ベルルと共に刊行した『最後の日々』(Les Derniers Jours)であろう。この雑誌は一九二七年二月から七月までの間に七号を出しただけの短命に終わったが、ドリュはその創刊号の論文「資本主義、共産主義、精神」の中で自らが求めている革命について次のように述べている。「今日までの人間によって知られ、認められてきた諸価値の体系を救おうとする必要はない。なお生きつづけているものを保持しようとする必要はない。死せるものを保持することはできない。葬礼のために著者たちを募ることはできないのだ。過去においてなお人間の愛をかりたてたあらゆる諸価値は、それらの現在の形態のなかで死滅していかないばかりでなく、それらの本質においても感動的なものである。人間が向かおうとしている革命は、たんに政治的、経済的な仕組みを修正するだけではなく、その精神の構造を新しくしようとするものである。」<sup>(20)</sup>この新しい革命がいかなる形をとるべきかについて、ドリュはこの時までその答を手に入れてはいなかった。一九二六年はすでにイタリアではムッソリーニの時代であったが、その年の一月から二月にかけてローマを訪れたドリュは、現

在のローマよりも過去のローマに興奮を覚えた。「不思議なことは、この興奮がファシズムへの好奇心をいささかもわたしに抱かせなかったことだ。一九二六年に二ヶ月間ローマに滞在しながら、わたしはムッソリーニと彼が始めた活動に関心をもつことがなかった。」<sup>(21)</sup>ドリリュにとってのこの時期の関心は新たに歴史に登場してきたファシズムではなく、むしろ現存の資本主義と社会主義（コミニズム）とに向けられていたのである。

ドリリュは一九二五年以降三四年に至るまで、『女たちに覆われた男』（一九二五年）、『ブレイシュ』（一九二八年）、『窓にもたれる女』（一九三〇年）、『ゆるめく炎』（一九三二年）、『奇妙な旅』（一九三三年）などの小説を発表する一方で、『若きヨーロッパ人』（一九二七年）、『ジュネーヴかモスクワか』（一九二八年）、『それぞれの祖国を超えてヨーロッパへ』（一九三二年）などの政治的エッセイを著した。それに加えて、一九三二年五月のアルゼンチンへの講演旅行が彼にとって大きな意味合いをもつことになった。ここでまず『若きヨーロッパ人』と『ジュネーヴかモスクワか』とを取り上げて、そこに展開されているドリリュの資本主義観と社会主義観をナシヨナリズムとの関連で検討してみよう。

『若きヨーロッパ人』を発表した一九二七年は、ドリリュにとって多忙な年であった。二月にベルルと共に雑誌『最後の日々』を創刊、九月にはスペインに住むアレクサンドラと再婚する。（この体験は後に『奇妙な旅』として結実した。）更に一九二五年以来気まづくなくなっていたアラゴンとの親交が、この年に最終的に途絶えた。

一九二七年五月に発表された『若きヨーロッパ人』はドリリュの自伝的部分とフィクションとがないまぜになった作品である。そこでは想像上の若きヨーロッパ人という設定とドリリュ自身の告白とが分かち難く結びついている。<sup>(22)</sup>自己を過度に投入した人物を通して現代を分析するというこのドリリュの方法は、これまで多くの批判に晒されてきた。

その代表的なものが、彼の長年の友人バンジャマン・クレミューによる批判である。彼によれば、『若きヨーロッパ人』は自らの自我と世界の分析とを受け入れ難い方法でもつれさせている。そこでは戦後の一神経症患者の告白が世界の状況の批判的な検討を妨げている、というわけである。しかしながら、ドリュの方法は正に自我の告白を通してしか社会の批判的分析を行なうことはできない、と主張する点にある。この私の中におこっている頹廢こそがフランス社会の頹廢の証左なのであるから、社会の批判的分析は先ずこの私の告白から始めねばならない。これがドリュの方法であり、『若きヨーロッパ人』に見られる「神話的記録」<sup>(23)</sup>の方法はその最も顕著な現れであった。

ところで『若きヨーロッパ人』は、本来別のタイトルで出されるはずの小説にその起源を有している。ドリュはクレマンやガストン・ガリマールにあてて、今書き始めている小説のタイトルについて『最後の日々の元帥』、『最後の日々の人々』、『最後の日々の書簡』を挙げてゐる。一九二四年以来あたためていたこの小説の構成として、ドリュは「幼年時代と青年時代」「ミュージック・ホール」「最後に行動、そして内乱」の三章を予定していた。結局、前の二章がそのまま採用され、第三章は日の目を見ずに終わったのである。<sup>(24)</sup>

第一章「若きヨーロッパ人」は、「私は地の果てで生まれた」という一文で始まる。彼がヨーロッパのどの国で生まれたかは定かでなく、父が誰であるかも知らない。分かっているのは、白人であるということだけである。彼は二十歳の時、戦争に参加する。そこで彼は男の暴力の内に生への意義を見出した。「女が子どものためにだけつくられているのと同じように、男は戦争のためにだけ生まれてきた。その他のことがらはすべて、最初の一投を投じた想像力の遅ればせのささいなことがらである、私はその時、むき出しの肉体の絶対的な力を感じ、根本にふれ、確実性を手に入れた。森から出てはならない。男は、墮落してはいるが望郷の念にかられた動物である。」しかし自らの部隊

が休息に入ると、突然に「この戦争の文明化された側面」<sup>(25)</sup>に退屈を感じるのである。

ここで注意すべきは、「若きヨーロッパ人」においては、戦争体験の意味は第一に、両義的なものとして把握されている点である。第二に、戦争の肯定的な側面としてヒロイズムの価値が強調されていることである。後の『ジル』における戦争体験の描写では生命の高揚が専ら語られ、しかもその場合、個の全体の中への融合という点に意味が付与されているのに比べると、この段階ではまだ戦争体験の一元化がおこなわれていないことが注目されるのである。

若きヨーロッパ人は戦場でドイツ軍の中を通過してスイスに逃れた。彼はパスポートを手に入れるために人殺しをして、それを使ってフランスからアメリカに渡った。そこで彼は仕事をみつけ、結婚し、子どもをもうける。アメリカ人の物質的力とヨーロッパ人の衰弱とを体験した彼は、サンフランシスコを経由して、ウラジオストックから更に、レーニンを間近から見るとともにモスクワに赴く。しかしそこで彼はロシアについて新しい認識を獲得する。「私は間違っていた。ロシア革命は私の思っていたものとは全く違っていた。この愚直な人々はアメリカ人になることしか考えていなかった。<sup>(26)</sup>」アメリカ人もロシア人も唯物論に毒されている。両者の違いといえば、ロシアには国家資本主義 (un capitalism d'Etat) がある点だけである。

ヨーロッパ人は衰弱し、アメリカ人とロシア人とは共に物質主義の中に埋没している。こうした時代認識を客観的に提示し分析したのが、翌年に出された『ジュネーヴかモスクワか』である。

『ジュネーヴかモスクワか』は、一九二六年から一九二八年にかけて『最後の日々』などの雑誌に発表されたエッセイをもとにして修正が加えられた「祖国の終わり」「資本主義、共産主義、精神」の二章に序文が付けられて、一九二八年九月に公刊された。この作品は、一九二五年にフレデリック・ルフェーヴルにあてた手紙の中で「あるフ

ランス人の告白」と呼ばれていたものである。<sup>(27)</sup> 又、一九二六年一月か二月に、ドリュはガストン・ガリマールにあって、この本をほぼ書き終えたと書き送っている。<sup>(28)</sup>

『ジュネーヴかモスクワか』におけるドリュの主張は、祖国の時代は終わり、ナショナリズムの観念はその役割を終えた、というところにある。ドリュは序文の中で『若きヨーロッパ人』との関連について「『ジュネーヴかモスクワか』は『若きヨーロッパ人』の対である。それは『若きヨーロッパ人たちのための学科』と名づけることができよう<sup>(29)</sup>」と説明している。

ドリュは序文において、アクション・フランセーズに傾倒していたかつての自分を回想した後に、現在の状況分析に移る。「今日ではそうしたものがすべてが消え失せてしまっている。人権主義も総合的ナショナリズムも静かに風化している。共産主義はドイツとハンガリーで撃ち損った。ロシアにおいてさえも、共産主義は社会主義の中に、その上民主主義の中に溺れている。<sup>(30)</sup>」こうしてドリュは「ヨーロッパ合衆国<sup>(31)</sup>」(Etats-Unis d'Europe)の構想を打ち出すのである。

しかし彼はそのための革命がおけると信じているわけではない。「革命は文明史のある瞬間にしかおこりえない。この瞬間は我々にとっては過ぎ去ってしまった<sup>(32)</sup>」からである。ここでドリュが依り所とするのは資本主義の力である。「私の待期の体系は次のような考えに基いている。すなわち、右の資本家たちは十分に知性があり精神的なので、損失を少なくすることができるし、教育のある技術エリート<sup>(33)</sup>の衝動を労働者階級や農民階級やプチ・ブルジョワジーによって行使される社会主義的コントロールと和解するような仕方<sup>(34)</sup>で、経済的、社会的運動の先頭に立つことができるといふこと、これである。<sup>(35)</sup>」今日の資本主義にそれが可能なのは、すでに自己組織し、自己規律できる地点にま

で資本主義が進化しているからである。<sup>34)</sup>それ故、本来は共産主義の理想であった生産の組織化が、今日では資本主義によって可能となったのである。<sup>35)</sup>

こうして資本主義がその実際においてもその習俗においてもその精神においても、もともとは共産主義の目的である共同の利益に沿うものとなったのであるから、この新しい性格をもった資本主義が「ヨーロッパ合衆国」の基礎となりうるのである。「ヨーロッパ資本主義はジュネーヴで連合し、《国際社会》(Société des nations)の内に政治的であるだけでなく社会的でもある新しい組織原理を置くこと。さもなければ、蓄積するにまかされた国内的・国際的なアナーキーの影が、何らかの黙示録的モスクワの側からアナーキーに対抗して集まってくるであろう。」<sup>36)</sup>

ドリユは『最後の日記』の中でも述べている通り、一九二八年のこの時点ではファシズムを積極的に肯定しているわけではない。むしろ資本主義の性格変化という経済的、社会的事実の上に立って、ナシヨナリズムの衰退を積極的に「ヨーロッパ合衆国」の構想につなげようというのが彼の意図であった。但し、自己規律力を持った資本主義という彼の認識は、一九二九年に始まる世界大恐慌の中で何らかの修正を余儀なくされたのではないか。臆測にすぎないが、このことが彼のファシズムへの傾斜の一つの要因になっていると思われる。

『ジュネーヴかモスクワか』以後のドリユにとって重要な出来事であったアルゼンチンへの講演旅行について、彼自身、「最後の日記」の中でこう語っている。「あの国で、ぼくの一生の最初で、また最後だと思いが一連の講演旅行(「ヨーロッパにおけるデモクラシーの危機」)をしているうちに、新聞の反応を見て、いよいよ西欧世界の生活が麻痺状態から脱け出し、ファシズムとコミュニズムというジレンマに引き裂かれるだろう、ということを感じた。あの時からぼくは、あわただしい足取りで、ひとつの政治的運命に引きずられて、顛落への道を急いだ。」<sup>37)</sup>この講演の

テキストは残されていないから、今日我々はそれ以上のことについて何も知ることはできない。ただ、いくつかの書簡からこの講演が成功を収めたことが見てとれる。<sup>38)</sup>そしてドリュはこれ以後ファシズムに傾斜していくのである。

ドリュにとって決定的なものが見えたのが一九三四年二月六日の事件である。ベルギー人の実業家スタヴィスキーの疑獄事件に始まった政府批判の声は、ついに二月六日大抗議デモをひきおこした。このデモにはリーグと呼ばれる多数の右翼団体が参加した。その中には、アクション・フランセーズを始めとして、「フランシスト」(Francistes)、「青年愛国団」(Jeunesse Patriotes)、「フランス連帯団」(Solidarité Française)、「火の十字団」(Croix de Feu)などが含まれていた。しかもこの抗議デモに参加したのは右翼だけではない。A・R・A・C(旧出征軍人共和連命)などの共産党系の組織も参加したのである。

小説『ジル』の中で、主人公ジルは右翼と左翼とが共に参加したこのデモの光景に興奮する。「右翼と左翼とのあいだにある柵は永久に破られ、生命の上げ潮はあらゆる方向へ勢いよく流れだすだろう。きみはこの大きな上げ潮を感じていないのか。上げ潮はそこに、我々の前にある。」<sup>39)</sup>そしてジルはこのデモの中に、第一次大戦体験で感じた生命の高揚を見出した。「われわれは戦争の炎に燃えて、いや、すくなくとも強烈な生命についての感動的なひとつの観念に永久につながられて復員したのだが、ついに何ごともおこらなかつた。」<sup>40)</sup>こうして一五年の歳月をへだてたものは越えられたのである。

ただし、『ジル』は一九三九年に出版されたものであり、一九三四年当時のドリュの思想とは多くの点で違いがあるだろう。その間にドリュはドリオの「フランス人民党」(P・P・F)に入党(一九三六年六月二八日)した後、ドリオがムッソリーニから資金援助を受けている事実が明るみに出るに至って彼と訣別している(一九三九年一月)。

従って、『ジル』が出版された頃には、フランスにおけるファシズムの可能性について、ドリュはより否定的だったと考えられる。

### 第三章 スペイン戦争

一九三六年七月、フランコの反乱に始まったスペイン戦争は、左右を問わずヨーロッパの知識人にとって大きな関心の的となった<sup>(42)</sup>。ドリュも一九三九年、第二次大戦の開始と共に予備部隊に召集されている時、スペインに文化使節として派遣してくれるよう運動したが、かなわなかった。ドリュは『ジル』の中でスペイン戦争の場面をエピソードとして設定した。そこにみられるナショナリズムの問題について簡単に検討したい。

『ジル』のエピソードでは、ワルターと名を変えたジルが、ファシスト側に立ってスペイン戦争に参加する。彼はあるオランダ人を殺してそのパスポートを手に入れ、それを使ってスペインに入り、バルセロナ、イビナ島、エストレマドゥーラで共和軍と戦闘をまじえる。物語は銃を手には赤軍と闘うジルの姿を最後に終わる。

この中で、ジル（ワルター）がスペイン戦争について語るのがイビサ島に向かうボートの中の場面である。彼はここで同じボートにのりこんでいるファシスト側の二人と会話をかわす。アイルランド人のオリヴァー・オコナーとポールランド人のスタニスラス・ザブロウスキーがその二人である。ポーランド人はファシズムの理念とカトリック教会の重要性を強調する。「ファシズムこそ真の革命だと思う。つまりヨーロッパがもっとも古いものともっとも新しいものとの融合してぐるっと転回することなんだ。ただし、ファシズムがカトリック教会を包含するかぎりにおいてのことだが<sup>(43)</sup>」



ここでワルターは「もしきみたちの国の政府がコミュニストと手をにぎってファシストと戦えと要請したら」と質問し、それに答えられない二人に向かって語る。「きみたちは教会に対して政治の方針と靈魂の方針とを混同していないように、ファシズムに対しても、普遍的な原理と、それを体現し場合によっては悪用しているもろもろの強国と同じ敬意を払う必要はない。もしもきみたちがそれぞれの祖国でファシズムを勝利に導くことができないう時、きみたちは自分の非力の残酷な結果を甘受して、万やむをえなければファシズムの列強に対抗している祖国を、反ファシズムの勢力に勝利をもたらす危険を冒してでも防衛すればよい。ファシズムは教会と同じく待つことができるからね。しかしファシズムを利用して列強に、きみたちの祖国そのものを犠牲にしてはいけない。<sup>(44)</sup>」

ドリュがここであげているファシズムの普遍的原理は「男性的カトリシズム、中世のカトリシズム<sup>(45)</sup>」とほぼ同義だと考えてよいだろう。ただし、この場合、カトリシズムはあくまで精神的権威という地位に限定されるべきであって、世俗的権威をもつことにはドリュは反対である。民主主義と結びついたナショナリズムにドリュは反対した。しかし、ここでワルターのようにファシズムの原理よりも祖国を上位に置くとすれば、ナショナルなものに対してドリュが何の価値も認めていないとは言えないであろう。実際に、ジルは結末の場面で「自分はスペイン将校ではない。こんな愚劣な戦争にまきこまれる必要がどこにある。<sup>(46)</sup>」とスペイン戦争に参加することへの懐疑心を吐露している。

このジルの疑問には二つの側面が含まれているように思う。第一に、スペイン戦争そのものがジルの考えていたような新しい革命ではなく、古い理念同士の対立にすぎない、という点である。しかし第二に、そもそもジルにとってファシズムの理念は、フランスを頹廢から救い出すためのものであった。従って新しい革命は、まさにフランスで行なわれねばならないのである。このように見てみると、ジル（ドリュ）にとってナショナリズムの問題は『ジル』

全編を通して結局残されたままであることがわかる。それはつまり、ファシズムの中にある二つの理念、社会主義とナショナリズムとをどのように調和させるか、という難問に他ならないのである<sup>(4)</sup>。

### おわりに

これまで小説『ジル』に即して、その舞台となった時代のドリユの歩みとその思想を検討してきた。フランスの頹廃という現実直面した第一次大戦後のドリユは、近代民主主義のバックボーンともいえるナショナリズムに疑問を抱き、「ヨーロッパ合衆国」の構想の中から次第にファシズムに傾斜していったように思われる。しかし『ジル』は最後までナショナリズムの問題を解決できなかった。ドリユのファシズムについては、彼の政治的エッセイの中で著ともいえる『ファシスト社会主義』について検討しなければならぬが、これについては改めて論じたいと思う。

最後にドリユの対独協力の問題にふれてこの稿を終わりたいと思う。ドリユが対独協力派となった理由についてはいくつかの説があるが、たとえばウィノックは、フランスの枠の中で不可能になったナショナリズムが拡大された「ヨーロッパナショナリズム」が既に、対独協力の先駆をなしていると述べている<sup>(5)</sup>。しかし既にナチスに幻滅を感じていたドリユが、対独協力を「ヨーロッパ合衆国」の構想の実現の一環として考えていたかどうかは疑わしい。むしろ占領下でのフランスの生き延びる道を模索していたと考えた方が、ドリユの心情に近いのではないかと思う。しかしこの問題はヴィシー政権の性格規定とその内部構造の検討を待たねばならず、ここではこれだけに留めたい。

## 註

- (1) モーリス・ナドールはドリュの戦争責任を次の三点に要約している。「すなわち、まず何年にもわたってファシズム、ヒットラー、ドイツの弁護をやっていた諸新聞の記事のゆえに、つぎに『ヌーヴェル・ルヴェ・フランセーズ』誌の編集を引き受け占領軍に協力した責任のゆえに、さいごにジャック・ドリオの党への所属のゆえに。」(篠田浩一郎訳『現代フランス小説史』みすず書房、一九七六年、二六頁。)
- (2) ドリュは『ジル』につけた序文(一九四二年)の中で、次のように述べている。「これからお読みいただく小説『ジル』についてとくに語るためには、デカダンスという観念に戻らなければならぬ。その観念だけが、作品の根底をなす恐るべき機能不全を説明するからである。」Pierre Drieu La Rochelle, Gilles, Folio, Gallimard, P.16. 若林真訳『ジル』、国書刊行会、一九八七年、上巻一四頁。ドリュにとってのユダヤ人とは、このデカダンスを象徴する存在である。
- (3) 西川長夫「フランス・ファシズムの一視点—ドリュ・ラ・ロシエルの『ファシスト社会主義』について」、『思想』六六一号、八三頁。
- (4) デ・フェリーチェ、西川知一他訳『ファシズムを語る』、ミネルヴァ書房、一九七九年、二〇頁。
- (5) 「ジルの行動の一つ一つにドリュの『私』がしのびこんでいる。」(松本勤「∧ジル∨あるいは厳粛な道化」、八八頁(河野健二編『ヨーロッパ—一九三〇年代』、岩波書店、一九八〇年所収)。
- (6) 前掲松本論文、八三頁、八六頁。
- (7) *Recit secret, suivi de Journal (1944—1945) et d'Exorde*, Gallimard, 1961. ドリュ・ラ・ロシエル、平岡篤頼訳「秘められた物語」、二〇頁(『秘められた物語・ローマ風幕間劇』、国書刊行会、一九八七年所収)
- (8) 平岡訳、二〇頁。(傍点山本)
- (9) 平岡訳、二〇頁。
- (10) 平岡訳、一三頁。
- (11) 平岡訳、一四〇頁。彼が自伝的エッセイ『戸籍』の中で記すところによればこれは次のような事件である。彼は幼い頃、かわいがっていたピガレットという名の雌鶏の脚の皮を自分の爪ではがした。雌鶏はぐったりして飛ぶこともできず、ドリュは不安になってその雌鶏をわらの中に放置しておいた。その鶏が死んだことを知らずにいたドリュは、家族の前で父親から

その死骸を見せられたのである。(西川長夫「『三〇年代精神』と文学」、五一―二頁。)ピエール・アンドルーとフレデリック・グロウヴェールによれば、ドリュは未完の著作 *Notes pour un roman sur la sexualité* の中で、このビガレットの死によって善と悪とを発見し、自分の中にある悪に気づいた、と述べているという。確かに誰にとっても、善悪未分化な幼年時代から善と悪との存在する世界へと旅立つ日があるに違いない。しかし、その経験を三度にもわたって叙述するのはよくあるとはいえないだろう。Pierre Ardreu et Frédéric Grover, *Drieu La Rochelle*, 1979, pp. 23~24.

(12) 渡辺一民「不安と再建——兩次大戦間の思想」、四七三頁。(『フランス文学講座』五「思想」、大修館、一九七七年所収)

(13) ヴォルテール、丸山熊雄訳『ルイ十四世の世紀』(三)、岩波文庫、一〇一―二頁。

(14) 山口俊章『フランス一九二〇年代』、中公新書、一九七八年。

(15) "La grande erreur des surréalistes," *N.R.F.*, août 1925. Pierre Ardreu et Frédéric Grover, op. cit., pp. 177-182.

(16) マルセル・アルラン、若林真訳「ドリュ・ラ・ロシエル」、二〇五頁(『世界批評体系』七、筑摩書房、一九七五年所収)。

(17) 西川長夫氏はドリュの転換期として第一次大戦、一九二五年、一九三四年を挙げておられるが、本稿もこの見解に従いたい。

(18) 「ぼくはこの作品をドリュの傑作、彼の風貌の最上の表現と見なしている。理由は彼が戦争に復帰したからである。〔中略〕他人に対して真の愛情も大きな関心も持たず、彼はここで自分自身に全的に打ちこんでいるのだ。」「戦争はこの作品では、もっぱらドリュとの関係において描かれている。」(マルセル・アルラン「ドリュ・ラ・ロシエル」、二一〇頁)

(19) 平岡訳「秘められた物語」、五四―五頁。

(20) 山路昭「ドリュ・ラ・ロシエルとファシズムへの道」、『明治大学教養論集』第一五一号、一九八二年、七頁。

(21) 平岡訳「秘められた物語」一五三頁。ドリュはこれに続けてこう書いている。「その上、私はあの当時、辛辣なほどに懐疑的になっていた。一九一八年に戦争から帰還した時のフランスに対する失望の傷と、ヴェルサイユ条約やそのとき以来ヨーロッパでおこったいっさいのことに対する侮蔑の気持ちをそのまま維持していた。あんなに生気を失ったフランスのかたわらで、イタリアで何か動きだすなどとは思ってもよらなかった。」

(22) Pierre Ardreu et Frédéric Grover, op. cit., P.205.

- (23) ドミニク・デサンティはドリュのこの方法を「虚構的記憶の documythe (document mystique)」と呼び、その意義を次のように説明している。「作家の内では、想像上のものが戸籍上のものよりも、さらに強烈でより切実な現実を形作っている。」(Dominique Desanti, Préface à la réédition du Jeune Européen et de Genève ou Moscou, Gallimard, 1978, p. 12.)
- (24) Pierre Andreu et Frédéric Grover, op. cit., p. 202.
- (25) Le Jeune Européen, pp. 29—30. なお、この版は *Ecrits de jeunesse* (1941) のテキストに基づいており、一九二七年の版に作者自身の手による修正が加えられている。
- (26) *ibid.*, p. 35.
- (27) Pierre Andreu, 《Genève ou Moscou》, L'Herne, 1982, p. 256. なお、構成については p. 258.
- (28) *ibid.*, p. 256. また、一九二八年初めの『ラ・グランド・ルヴェ』のアンケートに対する答の中で、ドリュは次のように述べているという。「自分はこの間、一冊の政治的書物、すなわちブルジョワ(カトリックであろうと世俗人であろうと、少しばかりより社会的であろうとなかろうと)に以下の点を厳命する講義を書いている。一、ナシヨナリズムと訣別すること(『シュネーヴカモスクワか』)。二、共産主義をのりこえること(資本主義の国際組織)。三、教会が自らの世俗的貧しさを取り戻して自らの政治的無能さを主張しないかぎりには、教会に服することなく自らの精神的欲求を育てること。』」
- 第三の点は実現されなかったが、第一と第二の点は一九二六年から一九二八年の著作の中で論じられているテーマに対応している。(P. 257.)
- (29) Genève ou Moscou, p. 135.
- (30) *ibid.*, p. 140.
- (31) *ibid.*, p. 144.
- (32) *ibid.*, p. 144.
- (33) *ibid.*, p. 144.
- (34) *ibid.*, p. 260.
- (35) *ibid.*, p. 265.

- (36) *ibid.*, p. 308.
- (37) 平岡訳「秘められた物語」五三頁。
- (38) Pierre Andreu et Frédéric Grover, *op. cit.*, p. 242.
- (39) Gilles, p. 599. 若林訳『シル』下巻、一三三二頁。
- (40) 若林訳、一三三三頁。
- (41) F. Grover, "Chronologie," *L'Herne*, 1982, p. 17. 西川長夫「フランス、ファシズムの一視点」九二頁。
- (42) スペイン戦争については、齊藤孝『スペイン戦争』、中公新書、一九六六年参照。
- (43) Gilles, p. 672. 若林訳下巻二〇〇頁。
- (44) Gilles, pp. 673—4. 若林訳下巻二〇二頁。
- (45) Gilles, p. 658. 若林訳下巻二八六頁。
- (46) Gilles, p. 684. 若林訳下巻二一〇頁。この点について、松本論文一〇〇—二頁参照。
- (47) この点については山口定『ファシズム』、有斐閣、一九七九年、一四〇頁以下参照。
- (48) Michel Winock, "Une parabole fasciste: Gilles de Drieu La Rochelle," *Le Mouvement Social*, No 80, juillet—septembre 1972, p. 31

付記 本稿はもともと共同研究「スペイン戦争と知識人」の一部として予定されていたものであるが、そのテーマは後日の課題としたい。